

〔展覧会随想 その2〕

日本美術の里帰り展について

太平洋戦争中の日本人の行為について、「被害者意識が強く、加害者意識が弱い」とよく言われます。私はここで政治問題を取り上げるつもりはありませんが、日本の美術品の海外流出については、どうも日本人は被害者意識が強いようです。

古美術品を扱う美術館に勤め、日本美術史を勉強している私などが、一般の方の話を聞いてよく驚くのは、「優秀な日本の美術品が海外に渡ってしまっている」と考えられていることです。かつて、私はある英文学の先生から、「欧米の都市にはどこでも、日本美術が美術館に陳列されているから、あなた方研究者は、よいものを外国に取られて大変でしょう」と言われ啞然としました。そして、知識人のその先生が、よく海外の美術館を訪ねるのに、東京、京都、奈良の国立博物館さえ、ほとんど行ったことがないと聞いて、二度啞然としたことがあります。

確かに、日本人は海外旅行のとき美術館を訪ね、また海外から来た美術品の展覧会にはよく出掛けます。しかし、日本人が真に美術館好きかという点、どうも多くの人は国内の美術館には関心が薄いようです。もちろん、日本の美術館は欧米よりも歴史が浅く、まだ民衆のものとなっていません。それについては、私ども美術館員も反省すべきでしょう。しかし、ど

うも日本人は外国の美術品や在外の日本美術には敏感でも、国内にあるものには冷淡なのではないでしょうか。

最近、各新聞社の事業部により、在外の日本の美術品の里帰り展がよく開かれるのは、一般の美術愛好者にとっても、また研究者にとっても、大いに喜ばしいことです。それにより、私たちは海外に行かなくても、多くの自国の在外美術品に接することができるのです。ただ、その展覧会の質が主催者の宣伝するほど高くないことも、よくあるのです。

もちろん、マスコミも企業なので、自分たちの主催する展覧会について、ときにはその価値を過大に宣伝することも、当たり前でしょう。しかし、日本美術の里帰り展の会場で、それほどでもない展示品を前にして、「このようにかけがえのない名品が外国に取られてしまったのは、かえすがえすも残念だ」という声を聞いて、考えこんでしまうのは私だけではないでしょう。

確かに、アメリカのボストン美術館には、「釈迦靈鷲山説法図」、「平治物語絵巻三条殿夜討巻」、「吉備大臣入唐絵巻」などすぐれた日本絵画が所蔵されていますし、これに次ぐ蒐集を持つ幾つかの美術館があります。ただ、全般的にアメリカの各美術館の日本美術品は、わが国にとって惜しいほどではあ

りませんし、ヨーロッパのこの方面の蒐集は貧弱とさえ言えます。もちろん、浮世絵や根付などの特殊な分野では、海外のコレクションはすぐれています。この分野でも優秀なものが国内に残っています。そして、美術国の中で日本ほど、代表的な美術品が流出していない国はないとさえ極言できるのです。

こう言うと、一般の方は初めげげんな顔をされ、ついで「それなら私たちは安心できるのですね」と言われます。しかし、これは安心ばかりしてよいことなのでしょう。明治維新以後、日本はいちはやく古社寺保存法を作りました。また、太平洋戦争前には、国宝保存法により、美術品の流出にはどめが掛かりました。そして、日本は第二次世界大戦に敗れても、かつて植民地とならなかったため、国内から美術品を奪われませんでした。もちろん、戦後の一時期には若干の美術品がアメリカに売られました。その流出も文化財保護法により制限されました。

かけがえのない美術品の多くが国内に残ったことは、確かに幸せでしょう。しかし、外国の日本美術蒐集が必ずしも一級でないため、日本の文化的実力は、決して正當に認められていないのです。そして、最近の円高のため、日本の美術品が海を渡るとは、これまでよりもずっと困難なのです。そこで、保存上の問題はあっても、日本美術の名品を海外で展示する機会をもっと多くする必要のあるのではないのでしょうか。

ところが、多くの日本人はマスコミの取り上げる展覧会の開かれているときぐらいしか、国内の美術館を余り訪れようとはしません。

そして、かけがえのない流出美術品が里帰りしたという宣伝につられて、海外からの日本美術を並べた展覧会につめかけ、同類のものが国内に幾らでもあるのに、「このようなものを外国に取られて日本人はだめだ」という声を発するのです。海外の文化を尊敬し、外国人の日本文化研究に敬意を払うのは、よいことでしょう。しかし、日本人でも特に知識階級は、長い鎖国の影響もあって、どうも海外に目が向きすぎるようです。

最後に取って置きのお話を一つ。江戸時代の有田焼の磁器は世界的に評価されました。もちろん、有田焼は国内でも尊重され、名品が多く遺っています。しかし、オランダ東インド会社を通ずる海外からの注文に応じるため、輸出向きの製品も作られました。そういう輸出磁器はいまでもヨーロッパに沢山あります。ことに、プロシアのザクセン侯は、日本の輸出磁器を多く集め、その模倣作をマイセン窯で作らせたほどです。

かつて、日本の輸出磁器のドイツからの里帰り展が開かれたとき、私は会場でこういう声を耳にしました。「これほどの工芸品が外国に渡ったのは、本当に残念だ」と。これについて、いまアメリカなどに輸出されている日本車が、クラシック・カーとして尊重されるようになったとき、将来の日本人は「このようにすぐれた工芸品が海外に渡ったのは、かえすがえすも残念だ」と言うのでしょうか。これは決して笑話ではないのです。英会話の勉強だけが国際化への道だと考えず、日本人は真の国際人として、もっと度量が広がる必要がないのでしょうか。

(次長・成瀬不二雄)

季刊 美のたより No.108

平成6年8月18日

発行 大和文華館